

戸谷敏之の問題関心にみる魚肥研究の位置づけ

What Toshiyuki Toya Tried to Think Through his Research on Fertilizer Made of Fish

今井 雅之

IMAI Masayuki

要 旨

戸谷敏之はアチック・ミュージアムの水産史研究室で魚肥の研究を担当したが、その専門とするところは農業経済史であった。本稿では著作と師弟関係を整理し、彼の問題関心の中で魚肥研究がどのように位置づけられていたのか考えたい。

戸谷敏之は1933年（昭和8年）東京帝国大学経済学部合格するが、思想問題で入学取消となり法政大学に進んだ。法政大学では小野武夫や大塚久雄のもとで農業経済史を学び、大学卒業と同時に水産史研究室へ入った。水産史研究室では内浦漁民資料をはじめとする地方文書の分析を通して、魚肥について研究した。その研究は流通と消費の2つの側面からなされ、前者は「大津干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」などの干鰯問屋の研究として、後者は「徳川時代に於ける農業経営の諸類型—日本肥料史の一齣—」といった肥料の研究として結実している。

戸谷の問題関心を探るためその著作を分析すると、彼の師である小野武夫、大塚久雄の影響が大きいことがわかる。地域性への着目、農民の生活に対する関心、農村問題の解決を念頭に置く姿勢は小野のそれに近く、比較経済史的な発想、前期的資本への着目、宗教社会学的な問いの立て方は大塚のそれに近い。また同時代的な問題意識として、日本資本主義の史的分析という課題が共有されていたことも窺える。

以上を踏まえつつ戸谷が魚肥研究を通じて明らかにしようとしたことを考えると、以下の4点に整理できる。

「魚肥の具体像」「日本肥料史の特質」「農業経営の類型」「農村の貨幣経済」

戸谷にとって魚肥は、農業経済史と水産史を結びつける重要なテーマであり、様々なレベルの問題関心に応えることができる魅力的な研究対象だったといえる。戸谷は一農家の具体的な経済生活から日本資本主義発達史に関する問題まで、様々なレベルの議論を展開したが、そこに共通するのは、理論先行で現実を軽視する当時の学問に異を唱えんとする姿勢である。

【キーワード】干鰯、メ粕、肥料史、農業経済史、日本資本主義論争

1. 本稿の目的

戸谷敏之は水産史研究室で魚肥の研究を担当したが、彼の専門は農業経済史であった。本稿では著作と師弟関係を整理することで、戸谷の問題関心において魚肥研究がどのように位置づけられていたのか考えたい。

2. 戸谷敏之について

1) 略歴

戸谷敏之(写真1)は1912年(大正元年)、長野県に生まれた。1930年(昭和5年)に第一高等学校へ入学し、1933年(昭和8年)には東京帝国大学経済学部合格する。しかし思想問題で一高卒業が取り消しとなり、東大の入学もまた取り消しとなった⁽¹⁾。東大への道を閉ざされた戸谷は翌年、法政大学予科に進み、1936年(昭和11年)に法政大学へ入った。当時法政大学では小野武夫や大塚久雄が経済史の研究を精力的に進めており、戸谷は彼らに師事しながら研究に励んだ。在学中に「イギリス・ヨーマンの研究」を発表するなど、若くして頭角を現し、1939年(昭和14年)、大学卒業と同時に小野の紹介でアチックの水産史研究室に“入学”した⁽²⁾。水産史研究室では魚肥の研究を担当し、内浦漁民資料や祭魚洞文庫に収められている古文書を分析した。またこの時期、並行して小野武夫の助手も務め、小作制度論や農業起源論についても研究を深めた。洋の東西を問わず、様々な史料を用いて文献実証主義的な研究を積み重ねたが、1945年(昭和20年)フィリピンにて戦没した。

2) 著作

戸谷は実質7年間の研究生活で15本以上の論文を発表した。ここでは全著作のタイトルを並べ、その全容を概観したい。



写真1 戸谷敏之(戸谷1949、扉写真)

1938年(昭和13年)

「イギリス・ヨーマンの研究」(『経苑』所収)

1939年(昭和14年)

「日本農業に於ける『新結合の遂行』」(『経苑』所収)

1940年(昭和15年)

「徳川時代に於ける農業経営の諸類型—日本肥料史の一齣—」(『アチック・ミュージアム・ノート』所収)

「大津干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」(『澁澤漁業史研究室報告』第一輯『アチック・ミュージアム・ノート』所収)

「内浦雑考」(『澁澤漁業史研究室報告』第一輯『アチック・ミュージアム・ノート』所収)

「徳川時代に於ける農業経営の諸類型—長防風土記を資料として—」(『社会経済史學』所収)

1941年(昭和16年)

「近世小作制度の態様とその變質について—大審院民事判

決録を資料とせる一」(『帝國農會報』所収)

「江戸干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」(『澁澤水産史研究室報告』第二輯『日本常民文化研究所ノート』所収)

「長防風土記に現れたる肥料の研究—日本肥料史の一齣—」(『澁澤水産史研究室報告』第二輯『日本常民文化研究所ノート』所収)

1942年(昭和17年)

「明治前期の小作慣行調査—故巖本善治氏の手に成れる—」(『農業經濟研究』所収)

「旧藩政時代に於ける阿波の農業經營—後藤家文書の紹介—」(『帝國農會報』所収)

「近世商業仲間の獨占について—大阪干鰯仲間記録を資料とせる—」(『社會經濟史學』所収)

「明治前期に於ける肥料技術の發達—魚肥を中心とせる—」(『日本常民文化研究書ノート』所収)

「明治前期に於ける武蔵野—農家の經濟生活」(『經濟史研究』所収)

「古島敏雄『近世日本農家の構造』紹介」(『社會經濟史學』所収)

1943年(昭和18年)

『切支丹農民の經濟生活』

1944年(昭和19年)

「江戸時代の魚肥仕法」(『社會經濟史學』所収)

1948年(昭和23年)

「中齋の『太虚』について—近畿農民の儒教思想—」(『日本農業經濟史研究』所収)

1949年(昭和24年)

『近世農業經營史論』

1954年(昭和29年)

「東浦賀干鰯問屋仲間(遺稿)」(『常民文化論集1』所収)

初期の2本は在学中に法政大学の雑誌に発表したもので、資本主義の發生に関する農業經濟史の論考である。1940年(昭和15年)のアチック入所後は、魚肥研究を任されたこともあり、「日本肥料史の一齣」シリーズが続々と出されていく。またこれと並行して、経済学系の学会誌『社會經濟史學』などにも肥料や農家經營に関する論考が發表されるようになる。そして没後を含む晩年には、「切支丹」や「儒教」といった宗教的なテーマが現れてくるのが見て取れる。これらの詳細に関しては後に改めて検討することとして、ここでは論考發表の場が、法政大学関係誌、アチック関係誌、経済学系学会誌であったことと、数としては肥料をテーマとした研究が最も多いことを確認しておきたい。

3. 魚肥の研究

戸谷の魚肥研究は、干鰯問屋に着目した流通の研究と、肥料全体における魚肥の位置づけに着目した消費の研究に大別できる。本章ではそれぞれについて具体的に見ていく。

1) 流通

戸谷は魚肥の問題を考えるにあたり、流通の側面に着目した。「季刊アチック No. 1」ではその理由を次のように述べている。「魚肥の問題は、畢竟干鰯問屋の記録を調査し、流通過程の視角より見る外ないと考へます」[アチック 1940、p. 7]。おそらく魚肥それ自体について直接的に言及す

るような古文書が見つからなかったのだろう。そこで戸谷は干鰯問屋仲間の古文書を読み解いていくことになる。

最初に発表した干鰯問屋仲間の論文は、「大津干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」であった。この論文ではまず、干鰯問屋仲間の歴史とその性質が整理され、続いてそこで取り扱われた数々の金肥（商品として売買される肥料）について言及している。具体的には、干粕生粕⁽³⁾・酢粕・干醬油粕生醬油粕・上粕下粕・鳩糞・鳥糞・上飴粕・粉米飴粕・田葉米眞・肥し糠・唐粉の粕・不切から粕・糊粕・雑魚粕・昆布鹽・木灰藁灰汁出し・ほこり・煤・肥し石灰・種油粕・胡麻粕・荏粕・眞粉粕・ばた粕・鯡・笹目・白子・數小・目切・油取・干鰯が挙げられている。干鰯問屋が魚肥だけでなく、金肥全般の流通を取り仕切っていたことがわかり興味深い、ここでは魚肥に関するものだけ引用する。

(12) 雑魚粕 鰯や鯡以外の魚類から油を搾った粕のことであらう。雑魚として、鯨、秋刀魚、海豚、鱒、鯖、河豚等を數へ得る。

(24) ばた粕 ばたとは何を指すのか皆目不明であつたが、澁澤先生の御教示により『ヒラ』の方言なることを知り得た⁽⁴⁾。現在伊豫の大島では『ヒラ』を『バタ』と呼ぶ。又第二回水産博覽會審査報告書を見ると、香川縣より『ばた網』を出品してゐるが、これも『ヒラ』を捕る網を指すのだらう⁽⁵⁾。瀬戸内海でとれた『ヒラ』を近畿の農民が施用してゐたのは十分注意しなければならぬ（後略）

(25) 鯡・笹目・數子・目切・油取 北海道産の此等は、敦賀を経て當地方に入つた。鯡と言ふのは加工せず其儘乾燥せしめたもの、笹目は鰓胸部内臓の總稱、白子は雄魚の精液、數子は鯡、目切は胴鰾の乾燥中頭を落したもの、油取は搾糟を意味すると推察せられる。大蔵永常は鯡につき、畿内北國のみこれを施用し、諸他の地方では殆ど使はれぬと述べて居る。

(26) 干鰯 徳川時代最も重要視せられた金肥は干鰯である。産地は上總、下總、常陸を中心に、南部・松前・遠江・三河・伊豫・豊後などであり、問屋は江戸、浦賀、大阪、兵庫、大津、尾道に所在し、近畿、中國、四國、近江で綿や藍や稻の栽培其外に施用された。

[戸谷 1940b, p. 244-245]

これに続き、御定書や農書の記述をもとに魚肥の流通経路について検討し、次のようにまとめている。

北海道産の鯡や日本海で捕った鰯は、敦賀より陸路鹽津・海津・大浦に輸送され、それより湖上を大津迄運ばれたのである。（中略）関東の干鰯粕は、大阪より六地藏・伏見を経て大津にもたらされたのである。當時、大津と伏見・六地藏の間には牛車が往來してゐた。[戸谷 1940b, p. 246]

このようにして、大津の問屋に何がどのような経路で入ったかが具体的に明らかにされた。

続いて発表した論文は、「江戸干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」であった。先の論文と同様、最初に問屋の歴史と性質について分析したのち、江戸の干鰯問屋と関係のあった産地の国、具体的な浜の名前、そして備考として漁法や製法などの特徴についてまとめている。一例として内浦のある安房の國を引用する。

國 安房

濱 内浦、小湊、天津、浜菽

備考 房州本場干鰯と唱へ、八手網を用ひ、漁師は鮪まぐろ漁を兼ねる。

濱 前原、磯村、天面、波太

備考 中西物と稱し干鰯の出來宜しからざるもメ粕は無砂にして上品、八手網を用ふ。但し前原には地引網が三張ある。

濱 平館

備考 鰯（サンマ）漁もあり

濱 七浦、女良、相濱、伊戸、根本、洲崎

備考 房州西方干鰯と稱し身薄であるが、上珍出來宜しく、八手網を用ふ。子船二艘張。仕入金を少し宛貸與へてゐる。

濱 勝山、天神山

[戸谷 1941b, p. 60-61]

安房のほか、江戸の干鰯問屋と関係した産地は武蔵、相模、上總、下總、常陸、奥州があったことが示されている。一方、消費地についても地区、国郡村、問屋について具体的にまとめており、その最大の送り先は大阪であったことを読み解いている。

戸谷は干鰯問屋仲間の分析を通じて、魚肥の流通、すなわちどこで生産され、どの経路で運ばれ、どこに卸されたかを具体的に明らかにした。魚肥が近世における重要な金肥であり、広域的に取引されていたことを考えると、魚肥の全体像を明らかにする上で問屋の記録に着目したことは慧眼だったといえるだろう。戸谷はこの他にも東浦賀、神戸、尾道の問屋仲間についての研究を予定していたが、論文として発表されたのは大津、江戸、大阪のみであった。なお戦没後に「東浦賀干鰯問屋仲間（遺稿）」が『常民文化論集 1』に掲載されている⁽⁶⁾。

2) 消費

戸谷は魚肥の問題を考えるにあたり、消費の側面にも着目した。金肥として流通した魚肥が、農家でどのように使用されたのかを具体的に明らかにしようとしたのである。戸谷はこうした自身の研究スタンスを次のように位置づけている。「肥料史の研究は従来も若干試みられたが、大體勸農政策史の域を脱しなかつた。其故私は、農學校や官省の試験場を離れ、茅屋の農家にも立入らうと思ふ」（戸谷 1942d, p. 1）。アチックの理念に共感し、実行しようとしていたことが伺える一文である。

最初に発表した消費に関する論文として、「徳川時代に於ける農業經營の諸類型—日本肥料史の一齣—」がある。本論の一節は「各地に於ける施用肥料の種類」の解明に充てられており、分析の対象として、近世の農書、村の明細帳、古老へのアンケートが用いられている。戸谷はまず日本を東北区、近畿区、関東区、東海区、東山区、北陸区、中国区、四国区、九州区に分ける。続いてそれぞれの区で記された農書から肥料に関する部分を抜き出し、比較している。村の明細帳についても同様であり、個々の村の明細帳一つ一つに目を通して、区ごとの肥料の特徴を見出そうとしている。今日からすれば、日本を9つの区に分ける根拠の乏しさや、引用される明細帳の地域的な偏り⁽⁷⁾が目につくが、地域性に着目する意識が乏しい当時において、この研究は画期的なものといえる。また古老へのアンケートとは、戸谷の師である小野武夫の調査成果を活用したもので、次のように分析されている。

〔A〕 東北區

緑肥・厩肥・人糞尿・木灰・大豆等が用いられ、金肥はアンケートに全く現れてゐない。

〔B〕 近畿區

ゴモノ・厩肥・人糞尿・緑肥・干鰯・菜種油。金肥たる干鰯・菜種油が可成り施用されてゐる。

(中略)

金肥を殆ど用ひぬ東北と、多量な金肥に依存する近畿の對立は著しく目につく。アンケートに現れた限り、關東區・北陸區中の新潟・中國區・九州區は東北に相似し、東海區・北陸區中の富山・四國區は近畿に相似する。〔戸谷 1940a、p. 50-51〕

9つの区が、金肥消費量の少ない東北型と、金肥消費量の多い近畿型に類型化できることを見出している。

豆州内浦漁民史料を研究対象とした論考、「内浦雑考」にも肥料の消費についての言及がある。戸谷は具体的に史料を引用しながら、漁村である内浦でも蒔敷をめぐる争いが起きたことや、山方の農村は内浦から金肥を購入していたことなどを明らかにしている。結論部を引用する。

大體に於て、田は蒔敷を肥料とし、畑は人糞尿・生鰯を主に使用してゐたらしい。金肥は殆ど用ひなかつた(中略)猶又長濱の漁民は、鰹^{マグロ}の臟物を大桶へ溜めて置き、これを山村へ相當の値段で賣却し、貨幣収入の補助とした。内浦附近の農村は金肥を施用してゐたわけである。〔戸谷 1940c、p. 150〕

同じ区の中でも、土地や生業に応じて施肥の状況は様々であることが示されている。

この視点を発展させ、「農山漁村の區別は、施肥にどういふ區別を齎して居るか」〔戸谷 1941c、p. 199〕について分析した論文として、「長防風土記に現れたる肥料の研究—日本肥料史の一齣—」がある。この論文では、農村、山村、漁村の代表となる村を一方所ずつ選定し、それぞれの村の収支を農家戸数で割り、一戸当たりの収支を求めた。算出項目には一反当りの金肥購入額も設定されており、これを比較した結果、山村や漁村の方が貨幣經濟に依存しているにも関わらず「『農村』は『山村』や『漁村』よりも多量の金肥を施用してゐる」〔戸谷 1941c、p. 224〕ことを明らかにしている。

肥料の歴史的な展開や具体的な施用技術についてまとめたものとしては、「明治前期に於ける肥料技術の發達—魚肥を中心とせる—」がある。戸谷はこの論文で明治期の内國勸業博覽會出品目録や農商工公報を分析し、明治前期の特徴として、燐酸肥料の施用増大傾向、魚肥需要の漸増、石灰濫用の3点〔戸谷 1942d、p. 52〕を読み解いている。これが明治中期になると、魚肥の高騰に乗じて中國大陸より安価な大豆粕が入り込み、金肥の主流となっていく。

肥料の具体的な施用技術に関しては、明治14年に勸農局が全国の老農を集めて意見交換会をした時の記録、『農談會日誌附録』の記述をもとに分析している。岐阜や埼玉、福岡などの事例を引きつつ、次のようにまとめている。「明治前期に於ける魚肥の施用方法は、粉末にして其儘撒布するか人糞尿に混和する場合と、粉末にせず煎沸するか水糞に混ざる場合とがあつた」〔戸谷 1942d、p. 112〕

以上のように、戸谷は様々な資料を駆使して魚肥の歴史的な解明に努めた。彼の研究姿勢の特徴は、個別具体的な事例を丹念に追いつつも、データを類型化することで比較可能なものとした点にある。この作業を通じてより大きな議論へと接続しようとしていたことが伺えるが、これについては後述する。

4. 師弟関係

戸谷の問題関心を探るため、彼の師弟関係について整理しておく。戸谷の著作からは、師である小野武夫、大塚久雄の影響が少なからず見られるためである。

1) 小野武夫

小野武夫(1883-1949、写真2)は法政大学教授で、戸谷の指導教員である⁽⁸⁾。農民経済史、土地制度史についての実証的な研究を残した。大正期は農商務省や帝国農会の嘱託として農書の筆写作业や永小作慣行の調査を経験。1926年(大正15年)に法政大学経済学部講師となり、1931年(昭和6年)同大学教授となった。1936年(昭和11年)にアチックへ入所し、1938年(昭和13年)に『宇和島藩 吉田藩 漁村経済資料』をアチックの彙報として発表⁽⁹⁾。1939年(昭和14年)、大学を卒業した戸谷をアチックに紹介した。同時期、小野は土地制度史論や農業起源論の研究にも従事しており、戸谷は小野の助手として資料整理などを手伝っていた⁽¹⁰⁾。

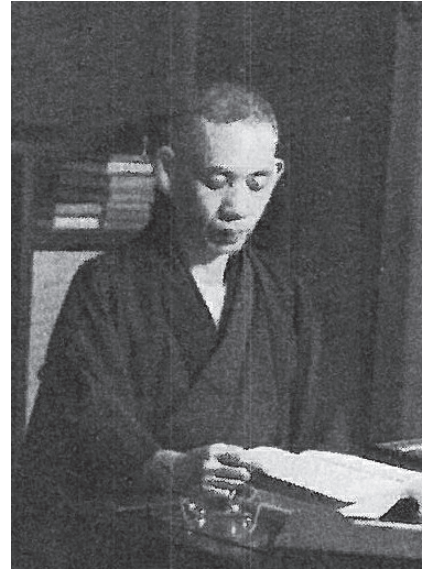


写真2 小野武夫(小野1977、扉写真)

小野の研究が戸谷に与えた影響としては、次の3点が挙げられる。①地域性への着目、②農民の生活に対する関心、③農村問題の解決を念頭に置く姿勢。以下、順に見ていきたい。

①地域性への着目

戸谷は日本の農村を一枚岩として捉えるのではなく、地域による違いに注目したが、これには小野の影響が考えられる。戸谷は小野の著作、『徳川時代の農家経済』を評して次のように言う。

博士は材料を廣く全國に求められた爲め、立論の視野は自ら廣く、『各地特有の事情を有體に抽出』することに成功せられた。以上の意味から、本書の出現は農業經營史研究上期を劃したのである [戸谷1949、p.2]。

先に見たように、戸谷の研究には地域を類型化して分析する手法が度々用いられているが、これは「各地特有の事情」へ着目しようとする小野の姿勢に影響されたものと見ることもできる。

②農民の生活に対する関心

先に戸谷が「茅屋の農家にも立入らうと思ふ」と宣言していたことを述べたが、この姿勢にも小野の影響が考えられる。小野は公官庁の嘱託職員として文書の研究をおこなう一方で、地域の古老を訪ねて話を聞くなど、農民の目線に近いところで物事を考えようとした。この姿勢が顕著に表れている著作の1つとして、『村の辻を往く』がある。冒頭部分を引用する。

國の社會を形造る村の人々が、今如何なるを考えつゝあるか、又は村總體としての集合生活に於て、村の住民が今如何に働きてつゝあるかを、あつさりと書いて見たい。是迄世間で試みられた方式から外れて、高い處や、遠方から村を窺くやうな態度を取らず、村の子が村の木戸に立ちながら、その

内相を語るやうな気持ちで観て行きたいと思ふ。[小野 1926、p. 1]

後年、小野がアチックに接近していく理由がよくわかる一節である。なお、戸谷の場合は小野ほど現地調査をした形跡がないが、古文書の読み方からは、農民の生活に寄り添って物事を考えようとしていたことが端々から伺える。一例として『切支丹農民の經濟生活』の一節を引いておく。

浦上村の山里の農業経営は、可成り粗放でありながら、市場生産の性質を強く帯びてゐたところに特徴がある。農事技術が低度で自然經濟の色濃きまゝ、貨幣のため分解せしめられ、小商人・日雇・小作百姓となつた農民は、浮沈が極めて甚だしかつた。現世の無常を一入強く感じ、死後に希望の絲を繋ぎ、アニマ（靈魂）の救拯を欣求した彼等の心持が推量せられる [戸谷 1943、p. 227-228]

③農村問題の解決を念頭に置く姿勢

戸谷が研究対象とした時代は江戸から明治であったが、間接的には同時代の農村問題の解決を見据えていた。戸谷の集大成とも言うべき『近世農業経営史論』の結語でも、「本研究の成果を、我が国農業が現在當面する重要課題と開聯して評價したい」として、農家の適正規模について言及している。

彼の師である小野の場合、この姿勢はより顕著である。それは『農村研究講話』、『農民運動の現在及び将来』、『最近農業問題十講』といった著作のタイトルからも容易に伺える。なにより、代表作ともいえる『永小作論』が農商務省の小作制度調査の成果であり、その背景には小作争議の頻発という同時代的な問題があったことを見過ごすわけにはいかない。

また、小野は農本主義的な社会運動にも関与していた。彼は農本主義者の共同戦線ともいえる日本村治派同盟の会員であり、岡本利吉が富士山麓に開校した農村青年共働学校の講師も務めている。經濟史の研究者でありながら現実の問題にも目を向けるこうした姿勢について、次のような言葉で青年に訴えている。

今や我國の農業問題は諸他の一般社會並に經濟問題と共に、異常の急角度を以て轉換しつゝあるから、青年諸君、殊に學窓にある青年諸君は、一面經濟理論を徹底的に咀嚼する必要あると共に、他面學窓の外に旋回しつゝある實際問題にも絶えず其視野を放たねばならぬ [小野 1936、p. 3]

戸谷はこのような指導教員の下で学び、卒業後もその助手を務めた。戸谷の学問に対する姿勢は小野から学んだものが大きいと思われる。

2) 大塚久雄

大塚久雄（1907-1996、写真3）は法政大学教授。マルクスの經濟学とヴェーバーの社会学の影響を受けつつ大塚史学を確立した。戸谷が法政大学予科に入学した1934年（昭和9年）に法政大学經濟学部非常勤講師となり、翌年27歳の若さで同大学助教授となった。戸谷は大塚の演習に参加し多くを学ぶと共に、若き日の大塚のよき議論相手となった⁽¹¹⁾。

大塚の研究が戸谷に与えた影響としては、次の3点が挙げられる。①比較經濟史的な発想、②前期的資本への着目、③宗教社会学的な問いの立て方。以下、順に見ていきたい。

①比較經濟史的な発想

戸谷は同じテーマを異なる国や地域で検証する傾向がある。処女論文である「イギリス・ヨーマンの研究」と2作目「日本農業に於ける『新結合の遂行』⁽¹²⁾」は、資本主義発生の要因をイギリスと日本を対象に検討したものであり、晩年の『切支丹農民の経済生活』と「中齋の『太虚』について—近畿農民の儒教思想—」は、キリスト教と儒教が資本主義に与えた影響について検討したものである。先に紹介した大津、江戸、東浦賀の干鰯問屋仲間の研究にも同様の傾向を見ることができる⁽¹³⁾。

このような研究姿勢がどのように形成されたのか考えた時には、彼の師であり議論相手であった大塚の存在が浮かび上がる。大塚は自らの研究を比較経済史と呼び、その意義を次のように説明している。

「縦に横にさまざまに比較してみますと、ある国のある時代だけに目を奪われているかぎりなかなか見えてこないような大切なことがらが、比較によって誰の目にも明らかなようにはっきりと見えてくる。そういうことが実際にしばしばあるのです」[大塚 1986、p. 66]。

事実、戦前の大塚の代表作の一つである『欧州経済史序説』は、イギリス資本主義の発生をオランダとの比較によって位置づけようとした研究であり、戦後の代表作の一つである『共同体の基礎理論』も、土地占取の形態をアジア、古典古代、ゲルマンの比較において整理したものである。

最後に、戸谷に直接的な影響を与えたと思われるエピソードとして、長年大塚の著作の編集を務めた石崎津義男の次の回想を挙げておく。

大塚は生前の戸谷といっしょに、三河の安城と信州上水内郡のリングの産地との比較研究をすべく調査を始めたことがあった。その結果、名古屋・岐阜地方に〈局地的市場圏〉が存在したとほぼ確認できる段階まで調査は進んだが、戸谷の応召で途絶してしまった。懐しい、そして残念な記憶だった [石崎 2006、p. 98]

②前期的資本への着目

前期的資本とは、一言でいえば産業資本確立以前に存在した資本、具体的には商業資本や高利貸資本のことを指す。大塚は非常勤講師時代、「いわゆる前期的資本なる範疇について」を發表し、「前期的資本が封建社会の崩壊過程および資本主義社会の成立過程において果たした大なる役割」[大塚 1969、p. 28] に着目すべきことを説いたが、これをいち早く評価したのが戸谷であった。戸谷はその後、自らの研究の中でこの課題に答えていくこととなる。戸谷の著作からは、その端々に前期的資本を具体的に解明しようという意識を読み取ることができるが、その最たるものは一連の干鰯問屋仲間の研究であろう。問屋は近世期の商品流通を考える上で重要な位置を占めていたため、戸谷はこれに着目することで資本主義前夜の商業資本の具体的な様相を明らかにできると考えた。なかでも特に注目したのは、干鰯問屋仲間による独占の問題であった。大津干鰯問屋仲間の研究では、「公力による独占の保護とこれに対する問屋の金銭負擔を突き止め」[戸谷 1940b、p. 238]



写真3 大塚久雄（大塚 1969、扉写真）

ており、また江戸干鰯問屋仲間の研究では、「干鰯メ粕の直段は干鰯問屋が仲間内部の競争で決定する」[戸谷 1941b, p. 58] ことを明らかにしている。この独占に対する問題意識にも大塚の影響が考えられる。大塚は戸谷が経済学部に進学した 1936 年（昭和 11 年）に「初期資本主義におけるいわゆる「独占」について」を発表しており、そこでは「最新型の集中・独占とは厳密に区別されるところのこの古い型の集中・独占について、その歴史的規定性を明らかに」[大塚 1969, p. 84] することが目指された。戸谷の干鰯問屋研究は、前期的資本の具体的な解明を目指したものと見ることもできる。

③宗教社会学的な問いの立て方

戸谷の論考の中には、『切支丹農民の経済生活』と「中齋の『太虚』について—近畿農民の儒教思想—」という一見不思議なタイトルのものがある。切支丹と儒教⁽¹⁴⁾ という、宗教に関するこれらの論考が何に影響されたのか考えた時、戸谷の師である大塚と、その大塚が影響を受けたマックス・ヴェーバーに思い至る。ヴェーバーは宗教社会学の立場から、世界各地の信仰を社会経済との関係において考察しているが、最も有名なものとしては、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が挙げられるだろう。この研究は、資本主義の精神が生まれてくる条件を禁欲的プロテスタンティズムの倫理の中に見出そうとしたものだが、この視点を踏まえて戸谷の論考を読むと、戸谷が何を指したのかがわかりやすくなる。『切支丹農民の経済生活』の一節を引用する。

切支丹農民は、経済倫理を特別有せず、其限りに於て農事改良をもたらしことなかつたろう。否却つて、通常の農業を怠る傾きさへも見られたらしい。[戸谷 1943, p. 252]

「中齋の『太虚』について—近畿農民の儒教思想—」の場合は逆に、「禁欲プロテスタンティズムと中齋の太虚思想は軌を一にする」[戸谷 1948, p. 161] として両者の類似性が指摘され、結論部では次のような見解が示される。

日本の農民は、全體として貧困な者が多いけれども、局地に富裕な所が見られた。攝津國西成郡の如き、著しい例と言ひ得よう。中齋の太虚思想を培養したのは、西南日本に於けるこのやうな富裕地帯の上層農民でなかつたろうか。[戸谷 1948, p. 172]

つまるところ戸谷は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の日本版を試みたのである。

以上見てきたように、戸谷の学問的な関心は大塚の影響を受けている。別の見方をすれば、若き気鋭の研究者 2 人が問題関心を共有しながら、後に大塚史学と呼ばれる研究領域を作っていたとも言えるかもしれない。

5. 時代状況

続いて、戸谷が研究者として生きた昭和戦前期の学問を取り巻く状況を簡単に整理しておく。先に戸谷が思想問題で一高の卒業を取り消されていることを記したが、これは一言でいえば「アカ」つまり左翼勢力とみなされて官憲に検挙された事件が原因となっている。この事件に関しては、運悪く巻き添えにあったというのが実態であったらしいが [石崎 2006]、どちらかと言えば戸谷の思

想が左寄りだったことは確かである。戸谷の学友、宇佐美誠次郎は一高時代の戸谷について次のように語っている。

彼の使っている「資本論」を見た者は、何べんとなく読み返されたために全巻がことごとく文字通り一枚ずつばらばらになってしまっているのに驚かされた。その頃から親しい仲間たちの間で密かに作って廻されていた「歯車」という回覧雑誌に戸谷君の寄稿した多くの論文の中には、今日刊行しても注目されるような優れたものが少なくなかった。この「歯車」も、当時学生や青年たちの間で作られていた他の回覧誌と同じに特高警察の眼を考慮して完全に焼き捨てられてしまった [戸谷 1952、p. 126]

特高警察について言及されている通り、世はまさに治安維持法の暴走が加速してした時代であった。その中であって、カール・マルクスの思想体系は当時の学問に大きな影響を与えていた。経済学の分野でいえば、1932年（昭和7年）から1936年（昭和11年）にかけて発生した「日本資本主義論争」がある。これは日本資本主義の性質と明治維新の位置づけをめぐって、のちに講座派と労農派と呼ばれる人々の間でおこなわれた論争であり、当時学生だった戸谷にも大きな影響を与えたことは疑いない。なお、近代日本社会を封建遺制と捉え、ブルジョア民主主義革命の必要性を説く講座派の時代認識は、大塚史学の形成にも影響を与えた。このように華々しく展開された「日本資本主義論争」であったが、戸谷が法政大学に入学した1936年（昭和11年）のコム・アカデミー事件で講座派が検挙され、翌1937年（昭和12年）の人民戦線事件で労農派が検挙されたことにより強制的に中断された。左翼弾圧が学問の領域にも及んだ時代に、戸谷は農業経済史の研究をおこなったのである。当時の状況を宇佐美は次のように述べている。

同君の主要な研究対象は日本の農業問題といふ政治的意義深い根本問題であり、したがってその科学的研究は當時のタブーであったのである。そのため生前発表されたものはすべて検閲のため細心の注意が拂われ、いとしい『奴隷のこぼ』で書くことを餘儀なくされており、『奴隷のこぼ』をもつては書き得ぬものはすべて未発表のまま、筐底に藏し、あるいは将来の研究を期して覚え書きのまま残されることになった [戸谷 1949、p. 525]

農業問題が政治の問題であったことと、当時タブーとされた科学的研究が科学的社会主義すなわちマルクス主義を指すことを確認しておきたい。ちなみに、宇佐美が「奴隷のこぼ」と表現するものはおそらく次のような言い回しを指すと思われる。「先人苦心の跡を偲ぶと共に、偉大なる決戦下日本農業の使命を改めて顧みんとするのが本稿の目的である」 [戸谷 1942、p. 1]。「明治政府は、切支丹を憎悪しながら近世初頭の如き極端な處置をとらず、飽く迄もこれを教化せんと努力した。これ偏に、皇室の厚き御仁慈の反映と解される」 [戸谷 1943、p. 1] 戸谷の魚肥研究、ひいてはアチックの水産史研究は、こうした時代的制約のもとでなされたのである。

6. 戸谷の問題関心

以上、魚肥研究、師弟関係、時代状況の整理を通じて戸谷の研究を読み解いてきた。これらを踏まえ、改めて戸谷の問題関心を次の4つの視点からまとめてみたい。

①魚肥の具体像

戸谷は徹底的に魚肥の具体像を明らかにしようとした。その研究姿勢は文献実証主義的であり、研究素材は一農家の記録から農商務省の公報まで幅広かった。これは小野やアチックの研究姿勢を身体化した結果と考えられる。戸谷の研究により、魚肥の具体的な流通・消費の様相が明らかになった。このレベルで詳しい魚肥の研究は後にも先にも見られない。戸谷の専門は農業経済史であったが、民俗学の研究としても大きな成果を遺したと言えるだろう。

②日本肥料史の特質

戸谷は魚肥をはじめとする肥料一般に目を配り、日本肥料史を描こうとした。これは副題に「日本肥料史の一齣」と銘打たれた論文が複数あることから明らかである。戸谷にとって、肥料は農業技術の発達程度を測る必要な指標であった。そのため、時間的には近世から明治中期までの変遷が研究の対象となり、また空間的には日本各地そしてイギリスまでもが比較の対象となった。加えて特筆すべき点として、肥料の技術発達程度に差が生まれた原因を、経済学の視点のみならず、宗教社会学的な視点を踏まえて分析したことも挙げられる。

③農業経営の類型

戸谷は肥料を含め、様々な項目で日本各地の農業経営を比較し、類型化をおこなった。その結果見えてきた類型は、東北日本型と西南日本型、攝津型と阿波型のように空間的に分類されたものや、農村・山村・漁村といった地理的環境に基づいて分類されたものがあつた。これにより、当時日本資本主義発達史の解明という名の下で一枚岩的に捉えられがちだった日本の農業経営を、地域性を持つものとして提示した。

④農村の貨幣経済

魚肥は代表的な金肥であるがゆえに、農村がどれだけ貨幣経済に巻き込まれているかを測る指標となった。農業経営の類型化も宗教社会学的な経済状況の分析も、その根底には貨幣経済に対する関心があつたといつてよい。戸谷は史料の分析を通じて、貨幣経済の問題に対して次のような結論を導き出している。自然経済、貨幣経済なる概念は現実と其の儘一致せぬこと。貨幣経済と一概に呼んでも、限りなく程度の相違があり、且又それは多数に種別しうること。自然経済・貨幣経済なる言葉は本来流通の視角より見た概念であり、生産の事情を直接に投射しないこと。こうした概念・理論についての問題関心は、水産史研究室の研究者戸谷としては些事⁽¹⁵⁾であつたが、農業経済史学者戸谷としては重要なものであつた。

7. 結語

戸谷の魚肥研究は以上のような問題関心にもとづいてなされた。魚肥は、農業経済史を専門とする戸谷をアチックの水産史研究室と結びつける重要なテーマであり、様々なレベルの問題関心に応えることができる魅力的な研究対象だつたといえる。戸谷は、一農家の具体的な経済生活から日本資本主義発達史に関する問題まで、様々なレベルの議論を展開したが、そこに共通するのは、理論先行で現実を軽視する当時の学問に異を唱えんとする姿勢である。その意味で戸谷は、徹頭徹尾アチック・ミュージアムの同人であつた。

【戸谷敏之 年譜】

戸谷敏之（1912～1945）、長野県生まれ。1918年に一家で上京して以後、東京都小石川区（現文京区）で過ごす。東京帝國大學経済学部合格するが思想問題で合格取消となり、法政大学に進んだ。大学時代に小野武夫、大塚久雄のもとで農業経済史を学び、若くして頭角を現す。

大学を卒業した1939年、小野武夫の紹介によりアチック・ミュージアムに入所した。アチックでは水産史研究室の一員として魚肥の研究を担当し、内浦漁民史料をはじめとする地方文書を分析、「大津干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」、「内浦雑考」等の論文を執筆した。これに並行して渋沢敬三の支援を受けつつ個人の関心に基づいた研究も展開し、宗教と経済の関係を検証した『切支丹農民の経済生活』などを発表している。アチック在籍以前から小野武夫の助手も務めており、小作制度論や農業起源論についても研究を深めていた。これらの成果は小野の著作の中に結実している。

学問的な関心としては大塚の影響を受けつつも、人々の具体的な生活に着目するというアチックの研究姿勢を貫き、数多くの論文を執筆した。アチッカーの俊英と謳われ将来が有望視されたが、1945年フィリピンにて戦没した。

西暦	和暦	年齢 (数え年)	年譜
1925	大正 14	14	東京府立第一中學校入学
1926	昭和 1	15	
1927	昭和 2	16	
1928	昭和 3	17	
1929	昭和 4	18	
1930	昭和 5	19	第一高等學校文甲入学
1931	昭和 6	20	
1932	昭和 7	21	
1933	昭和 8	22	東京帝國大學経済学部入学試験に合格するが、思想問題にて第一高等學校卒業取消となり、東大入学も取消となる
1934	昭和 9	23	法政大學豫科入学
1935	昭和 10	24	大塚久雄の「いわゆる前期的資本なる範疇について」を評価しゼミを受講。大塚のよき議論仲間となる
1936	昭和 11	25	法政大學経済学部入学
1937	昭和 12	26	
1938	昭和 13	27	小野武夫の助手として土地制度史ならびに農業技術史研究に従事。以後論文執筆も手伝う 「イギリス・ヨーマンの研究」（『経苑』所収） 法政大學経済学部卒業
1939	昭和 14	28	小野武夫の紹介により、アチック・ミュージアム入所 「日本農業に於ける『新結合の遂行』」（『経苑』所収） 極洋捕鯨株式会社の捕鯨母船極洋丸芝浦入港に付き伊豆川ほか7名とともに参観に赴く
1940	昭和 15	29	「徳川時代に於ける農業經營の諸類型—日本肥料史の一齣—」（『アチック・ミュージアム・ノート』所収） 「大津干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」（『澁澤漁業史研究室報告』第一輯『アチック・ミュージアム・ノート』所収） 「内浦雑考」（『澁澤漁業史研究室報告』第一輯『アチック・ミュージアム・ノート』所収） 「徳川時代に於ける農業經營の諸類型 長防風土記を資料として—」（『社会經濟史學』所収）
1941	昭和 16	30	「近世小作制度の態様とその變質について—大審院民事判決録を資料とせる—」（『帝國農會報』所収） 「江戸干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」（『澁澤水産史研究室報告』第二輯『日本常民文化研究所ノート』所収） 「長防風土記に現れたる肥料の研究—日本肥料史の一齣—」（『澁澤水産史研究室報告』第二輯『日本常民文化研究所ノート』所収）
1942	昭和 17	31	「明治前期の小作慣行調査—故巖本善治氏の手になれる—」（『農業經濟研究』所収） 「旧藩政時代に於ける阿波の農業經營—後藤家文書の紹介—」（『帝國農會報』所収） 「近世商業仲間の獨占について—大阪干鰯仲間記録を資料とせる—」（『社会經濟史學』所収） 「明治前期に於ける肥料技術の發達—魚肥を中心とせる—」（『日本常民文化研究書ノート』所収） 「明治前期に於ける武蔵野—農家の經濟生活」（『經濟史研究』所収） 「古島敏雄『近世日本農家の構造』紹介」（『社会經濟史學』所収）
1943	昭和 18	32	『切支丹農民の經濟生活』
1944	昭和 19	33	東部第六部隊応召入隊 「江戸時代の魚肥仕法」（『社会經濟史學』所収）
1945	昭和 20	34	フィリピンにて戦没
1946	昭和 21		
1947	昭和 22		
1948	昭和 23		「中齋の『太虚』について—近畿農民の儒教思想—」（『日本農業經濟史研究』所収）
1949	昭和 24		「近世農業經營史論』
1950	昭和 25		
1951	昭和 26		

西暦	和暦	年齢 (数え年)	年譜
1952	昭和 27		「東浦賀干鯛問屋仲間（遺稿）」（『常民文化論集 1』所収）
1953	昭和 28		
1954	昭和 29		
1955	昭和 30		
1956	昭和 31		
1957	昭和 32		
1958	昭和 33		
1959	昭和 34		
1960	昭和 35		
1961	昭和 36		
1962	昭和 37		
1963	昭和 38		

注

- (1) 思想問題の内実は次のように説明されている。「戸谷敏之は第一高等学校で伊藤律（戦後の日本共産党の幹部、のち除名）と同期であった。彼は学友の宇佐美誠次郎（のち法政大学教授）と住居が近かったのでしばしば往き来していたが、宇佐美が検挙されたとき一緒に逮捕されてしまった」[石崎 2006、p.49]。
- (2) 戸谷は自己紹介の中で、アチックへの入所を入学と表現しており、当時アチックが如何なる組織・団体として認識されていたのか考える上で興味深い。「昭和十四年四月一日、アチック・ミュージアム入学。魚肥の勉強をさせていただきます予定。新生のこと故何も出来ませんので、戸惑ひして居ります、宜敷しく御願ひ致します。現住所、小石川区丸山町三十番地。文庫まで小一時間かゝりますので、九時半に間に合ふべく相当早起たるを要します」[アチックミュージアム 1939、p.2]。
- (3) 肥料に関する具体的な研究は戸谷以後大きな展開を見せていないが、酒粕をはじめとする会津地域の肥料については佐々木長生が『会津農書』の記述をもとに分析している。[佐々木 2018]
- (4) 渋沢の魚名研究の成果が早速戸谷の研究に生かされている。水産史研究のメンバーは各々が個別のテーマを追究しながらも、その成果については随時共有しあっていたことが伺える。
- (5) 戸谷の研究方法は古文書の分析であったが、漁具についても目配りしていたことが伺える。戸谷が民具部会の同人と直接的にやりとりをした記録は見いだせないが、「アチックマンスリー」などの紙面を通じて間接的に影響を受けていた可能性は否定できない。
- (6) 本論集の位置づけについて、櫻田勝徳が序の中で次のように語っている。「この論集は、戦後研究所に参加した若い人たちの能登研究を中心に編さんされたが、戦時中ゲラ刷りが出たのみで、ついに出版にいたらなかつた「澁澤水産史研究室報告 第3輯」にのせらるべき舊稿の一部と戦前からの同人の参加を得て、舊新両者の合作になつたことは誠にうれしい。今後もこれが新舊交流の場になれば最もありがたい次第である。そしてその舊稿の中には、英才をいだいて南海に戦歿された故研究員戸谷敏之君のものもあり、これを巻頭に掲げ得て、同君をしのぶよすがとすることもできた」[日本常民文化研究所 1954、p.3-4]。
- (7) 一例として東北區に掲げられた明細帳の一覧を挙げると、(a) 陸奥國會津村々差出書、(b) 出羽國村山郡山寺村明細帳、(c) 出羽國村山郡志戸田村明細帳、(d) 出羽國村山郡原町村明細帳、(e) 出羽國村山郡長崎村明細帳、(f) 出羽國村山郡畑谷村明細帳、(g) 出羽國村山郡原町村村差出明細帳、(h) 出羽國村山郡志戸田村明細御差出書上帳、(i) 出羽國村山郡奈良澤村明細差出帳、(j) 出羽國村山郡山口村村差出明細帳寫となっており、東北區を代表する事例の 10 分の 9 が村山郡のものである。資料的な制約があつたことは推察されるが、偏りがある感はない。
- (8) 同じく水産史研究室の伊豆川浅吉も小野から学んでおり、戸谷とともに「小野武夫博士還暦記念論集」を刊行している。
- (9) 小野は刊行の経緯を次のように述べている。「近年澁澤子爵が特に漁村經濟史の爲に研究所を經營せられ、且つ相當大規模の下に史料の蒐集をも始められたる由を聞き、此の宇和島吉田兩藩漁村經濟史料の出版方を相談したる處、同氏は快く之を引き受けられた。依て私は早速史料の整理に取り懸り、法政大学卒業後澁澤子爵の研究所に勤務中なる伊豆川浅吉氏を助手として、史料中の文書を分類し、且つ其の文字を校訂し、又語彙の書き出しをも試みたる後、全巻に對する解説をも加え、日本經濟史の水産史部門に於ける特殊史料として、之を學界に送り得ることになつたのである」[小野 1938、はしがき]。小野が水産史研究室を漁村經濟史の研究所と捉えていた点は興味深い。
- (10) 小野は『明治前期 土地制度史論』の序で次のように述べている。「此の研究に着手したのは去る昭和十六年

であつたが、當時常民文化研究所員たりし、戸谷敏之君が終始所要資料の書出しと、其の整理を助けて呉れた。その労を多とするものである」[小野 1948, p. 3]。また、一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センター所蔵の小野武夫文書の中には、戸谷が草稿を書き、小野が推敲したと思われる資料が複数ある。表題は以下の通り。「煙草渡来の沿革」、「渡来農業史」、「綿花伝播考」、「藍に関する考察」、「日本農業起源に関する論文」。これらのいくつかは小野の著作の中に結実している。

- (11) 大塚は当時のことを次のように回想している。「私自身も、すでに教師の位置に立っていたとはいえ、そのころはまだ大学を出てからそう長くはなく、年頃も彼とあまりちがわなかったので、むしろ半ば学友としてひじょうにしばしば対等の立場で議論をたたかわし続けた。これは私にとっても巨きなプラスとなった。そういう表現がゆるされるならば、世に大塚史学とか大塚理論などといわれている歴史理論の最初の輪郭が形作られつつあったころ、ヨウマンリーという中心テーマについて、こうして側面から力強い援助を与えられることとなったのであった」[戸谷 1952, p. 137-138]。
- (12) 『新結合の遂行』という言葉の意味について、飯沼は次のように解説している。「『新結合の遂行』というのは、『資本主義の発展』という言葉をはばかり、シュンペーターばりの用語を使ったのである。後でも触れるように、彼の研究には、最後まで、このような「はばかり」が感じられる。そして遂に、彼は、研究と発表との「自由」を、ただの一度も享受することなしに、その生命を絶たれたのであった」[飯沼 1964, p. 351]。
- (13) 一つの論文の中でも対比的に捉える傾向は見る事ができる。一例として、日本の肥料について述べた次の一文を挙げておく。「幕末の当地では、三十数種類の肥料が存在し、その品種の豊富なる、大農経営のイギリスをも凌駕する事実を知つた」[戸谷 1940b, p. 235]。
- (14) ここでいう儒教は日本陽明学を指している。なお中齋は大塩平八郎の別号であり、戸谷はその思想を次のように捉えている。「中齋は、張横渠から太虚を継承し、王陽明に致良知を藉り、両者を統合して》innerweltli he Askese《を導き入れ、禁欲プロテスタンティズム相似の思想を案出したのである。[戸谷 1948, p. 141]」
- (15) 戸谷は経済学系雑誌のみならずアチックの紙面上でもこの問題に言及しているが、その際には次のように前置きしている。「又私は、自然経済と貨幣経済の問題を金肥に絡ませて論じたけれど、これはもとよりネーベンザツヘである」[戸谷 1941, p. 189]。戸谷らしい配慮がなされた付言である。

参考文献

- 飯沼二郎 1964『地主王政の構造』未来社
- 石崎津義男 2006『大塚久雄 人と学問 付大塚久雄「資本論講義」』みすず書房
- 大塚久雄 1969『大塚久雄著作集 第二巻 近代欧洲経済史序説』岩波書店
- 大塚久雄 1969『大塚久雄著作集 第三巻 近代資本主義の系譜』岩波書店
- 大塚久雄 1986『大塚久雄著作集 第十一巻』岩波書店
- 大塚久雄 1986『大塚久雄著作集 第十二巻』岩波書店
- 小野武夫 1925『農村研究講話』改造社
- 小野武夫 1926『村の辻を往く』民友社
- 小野武夫監修 1934『農村問題辞典』非凡閣
- 小野武夫 1936『最近農業問題十講』巖松堂書店
- 小野武夫 1938『アチックミュージアム彙報第 26 宇和島藩 吉田藩 漁村経済資料』アチック・ミュージアム
- 小野武夫 1942『日本農民起源論』日本評論社
- 小野武夫 1948『明治前期 土地制度史論』有斐閣
- 小野武夫 1977『明治大正農政経済名著集⑤ 永小作論』農山漁村文化協会
- 佐野眞一 2010『崎人巡礼怪人礼賛 新忘れられた日本人』毎日新聞社
- 千葉県立関宿城博物館編 2017『平成 29 年度企画展図録 鯛は弱いが役に立つ—肥料の王様干鯛—』千葉県立関宿城博物館 友の会
- 戸谷敏之 1938「イギリス・ヨーマンの研究」『経苑』16号
- 戸谷敏之 1939「日本農業に於ける『新結合の遂行』」『経苑』17号
- 戸谷敏之 1940a「徳川時代に於ける農業経営の諸類型—日本肥料史の一齣—」『アチック・ミュージアム・ノート』18
- 戸谷敏之 1940b「大津干鯛問屋仲間—日本肥料史の一齣—」『澁澤漁業史研究室報告』第一輯『アチック・ミュージアム・ノート』19
- 戸谷敏之 1940c「内浦雑考」『澁澤漁業史研究室報告』第一輯『アチック・ミュージアム・ノート』19
- 戸谷敏之 1940d「徳川時代に於ける農業経営の諸類型—長防風土記を資料として—」『社会経済史學』11巻11、12

号

- 戸谷敏之 1941a 「近世小作制度の態様とその變質について—大審院民事判決録を資料とせる—」『帝國農會報』32卷4、5、8号
- 戸谷敏之 1941b 「江戸干鰯問屋仲間—日本肥料史の一齣—」『澁澤水産史研究室報告』第二輯『日本常民文化研究所ノート』23
- 戸谷敏之 1941c 「長防風土記に現れたる肥料の研究—日本肥料史の一齣—」『澁澤水産史研究室報告』第二輯『日本常民文化研究所ノート』23
- 戸谷敏之 1942a 「明治前期の小作慣行調査—故巖本善治史の手に成れる—」『農業經濟研究』19卷1号
- 戸谷敏之 1942b 「旧藩政時代に於ける阿波の農業經營—後藤家文書の紹介—」『帝國農會報』33卷6号
- 戸谷敏之 1942c 「近世商業仲間の獨占について—大阪干鰯仲間記録を資料とせる—」『社会經濟史學』13卷4号
- 戸谷敏之 1942d 「明治前期に於ける肥料技術の發達—魚肥を中心とせる—」『日本常民文化研究書ノート』28
- 戸谷敏之 1942e 「明治前期に於ける武蔵野—農家の經濟生活」『經濟史研究』30卷4、5号
- 戸谷敏之 1942f 「古島敏雄『近世日本農家の構造』紹介」『社會經濟史學』13卷7号
- 戸谷敏之 1943 『日本學術論集9 切支丹農民の經濟生活』伊藤書店
- 戸谷敏之 1944 「江戸時代の魚肥仕法」『社會經濟史學』14卷9号
- 戸谷敏之 1948 「中齋の『太虚』について—近畿農民の儒教思想—」『小野博士還曆記念論文集 日本農業經濟史研究』(上)
- 戸谷敏之 1949 『近世農業經營史論』日本評論社
- 戸谷敏之 1954 「東浦賀干鰯問屋仲間 (遺稿)」『常民文化論集1』
- 日本常民文化研究所編 1973 『日本生活資料叢書 第2卷』三一書房
- 日本常民文化研究所編 1973 『日本生活資料叢書 第6卷』三一書房
- マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳 1989 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店